

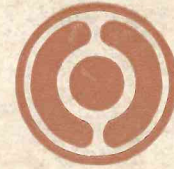
アジア綜合誌

# 天地人



一九五四年・新春  
第三年・通卷第七號

霞山俱樂部



## 鐘淵紡績株式会社

取締役社長 武藤 絲 治

本 部 大阪市都島区友淵町一二三  
船場出張所 大阪市東区淡路町四丁目五四  
東京事務所 東京都中央区銀座三丁目二



## 大日本紡績株式會社

取締役社長 原 吉 平

大阪市東区安土町二丁目三十番地





# 天地人

新春号

第三年  
第七号

目次

文化交流の仕事を進める  
ための心構えについて

釘本久春 4

中国人の文化受容態度

伊瀬仙太郎 10

## 筆

屠蘇考

青木正児 22

## 隨

遠州の辛酉紀行

小汀利得 26

## 春

邦楽の味わい

田辺尚雄 28

## 新

蘇東棉蘭

田中克己 30

淨智寺谷の支那村

関口泰 32

中共内政の諸問題

波多野乾一 15

自立経済確立への課題

山際正道 19

中国学界における文学研究を  
最近の成果と動向として

波多野太郎 50

横矢重道翁を憶う

緒方竹虎 48

観賞春の名詩

今関天彭 46

副島 蒼海小伝

大鹿卓 36

### 俳句

山廬新春……………飯田蛇笏 34

### 短歌

草色の服……………大野林火 34

### 詩

紅聲窩小吟……………吉井鷹 35

### 途

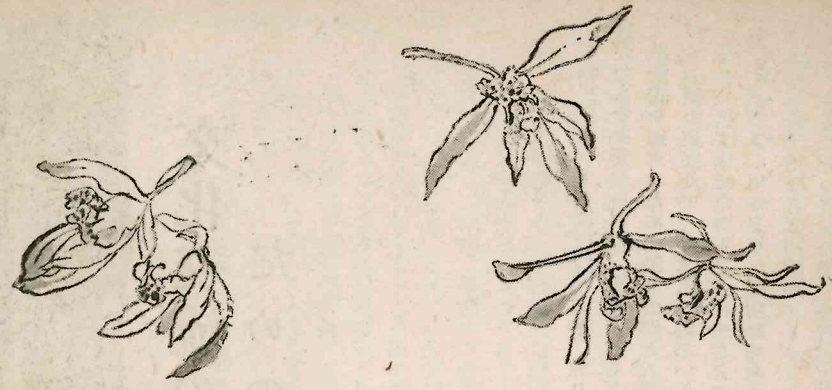
上……………神保光太郎 45

共同研究

中国の教育……………

中国社会文化研究会 56

表紙 伝 馬麟筆「梅花小窩」部分





月に江戸の中村座で名優瀬川菊之丞が長唄『風流相生獅子』を踊つて居た時、劍術の名人某がその途中で、手にして居た鉄扇を菊之丞の眉間目にかけて真剣に投げつけた。菊之丞は踊りながらそれを避けた。踊りが終つてから菊之丞はその劍客に投げた理由を尋ねた。劍客は之に答えて「自分は踊ることは知らぬが、踊つて居る菊之丞の身体に少しの隙がない。そこで自分は如何にすれば之に打ち込み得るかということ許り考へて居たところ、途中で一寸身体に隙が見えたので、思はず手にした鉄扇を投げたのだ」と言つた。菊之丞は「それは此の踊りには自分の心に不満足な点が一ヶ

## 蘇東棉蘭

田中克己

今から十年以上前に、南方で見て来た町々の中で一等美しかつたのは、仏印の柴棍の町で、生れてはじめて見るブーゲンヴィレアをはじめとする、濃い色彩の熱帯の花と、フランス式の建物との配色の美しさには、声をあげて感嘆せざるを得なかつた。

それから三カ月してスマトラの東海岸州へ行き、ペラワンといふ港で上陸して、トラックで町へ入つた途端に、あゝ美しいといふと同時に、柴棍をつくりとの感想を禁じ得なかつた。町の主要道路であるケサワン街に入るとホテル・デ・ブルがまず目につ

所あつて、踊りながらそこに行くとい寸心に隙が出来る。今日そこで鉄扇を投げられたのであるが、その鉄扇が眉間に当れば自分は死んでしまふ。その時自分は命がけで之を避ける瞬間に、新しい振りを考案した。それ故明日はその振りで踊るから、再び来て扇を投げてもらい度い」と頼んだ。劍客は翌日再び行つたが、もはや投げ込む隙は全く無かつたという。名人菊之丞は正に死ぬか生きるかという境目に、立派な作舞をして居るのである。常に命を神に捧げて、死生の境に日本の芸能は生れて行くのである。  
(東洋音楽学会会長)

く。テラスにはせの低い椰子の鉢をならべ、その緑に、ブーゲンヴィレアや仏桑花などの赤とが対照してあるところは、シンガポールの建物ばかりごたごたしてある印象とは、全然ちがつて久しぶりに熱帯の色彩美を感じしめたのである。

そこで居場所もきまり落着くと、毎日このケサワン街に出てゆく。一軒だけ開いてゐる喫茶店があるので、そこへ入つて冷しコーヒーのみ、ケーキを摂る。お客が私一人しかないので、どうしたわけか聞いてみると、我軍の将兵は軍の許可のない飲食店に

は一切立入禁止(オフ・リミットといふ語はもとよりまだ知らなかつた)なので、軍律を知らない私一人がお客なのである。もつとも一度だけ佐官が一人来てゐるのを見たが、これでしばらくするとこのティップ・トップといふ喫茶店は完全に閉店となる。我軍の軍律のきびしいことを証するに足らう。

この店へ通つてゐる中に、筋向ひの家に気がつくのは当然であるが、洋館ばかりのこの通りに全く中国式の館である。ここも立入禁止の筈だが、のぞいて見る位はよからうと、だんだん内部まで覗きこむことになる。表門を閉めてゐるので、くゞり門から入つて見ると、門の突当りの建物に扁額があり瑪腰第と記してある。これはわからないが、その下に欽差考察南洋各島商務大臣の官名が懸軸になつてゐる。

その日はそこまですして、さて役所に帰つて頭を捻つて見る。遂にわかつた。瑪腰はオランダ語のマヨール、在留華僑の長に与へられた称号なのである。主人は張歩春、字を公善といふメダン華僑の長と知ると会つて話したくなる。軍の許可を得ようとは考へられないので、直接当つて見ようと、刺を通ずると、占領軍の軍属の感光か、快く会つてくれる。奥の間に入れられて、煙草をすゝめ茶をもてなしながら、話すことを聞いて驚いた。「私は明治二十三年醇親王の訪日旅行に随員として参り、明治天皇にもお目にかゝりこの勳章を戴いた」といつて、勳三等の瑞宝章をもとり出して見せたのである。その時の官は郵伝部参議上行走広西試用道だつた由である。私は初めから失礼を詫び、慇懃にしてゐたつもりであつたが、更に失礼を詫び、今後の厚誼を冀ふととも

に、シンガポールからもつて来た数部の漢籍を示して、今日の土産物として、どれかを取めてくれるやうにと乞うた。張氏がそれを点検したあと、紀文達公の烏魯木齋雜詩を選び出したのには一層感興を深くした。これは公が若年、獄に坐して流された新疆の風物を歌つた詩集なのである。彼は西域、こちらは南洋にあつて、中国を懐ふの情で相通するものがあるのかもしれないと、私もいさゝか感慨を催はした。

しかし役所に帰つてしらべて見ると、聞きちがひだつたか、醇親王の訪日はなく、その子で瑞郡王だつた載洵が清の海軍部大臣となつて、日本をはじめ各国を視察に出発したのは、清末も清末宣統二年の七月のことであつた。時に我が明治四十三年で、日本海々戦にも勝ち、意気東洋を圧した我が艦隊の雄姿は、大臣はじめ随員の眼に何と映じたか。御老齢なほ外国使臣をよく遇したまはうた明治天皇の御様子はこの人にはいかゞに感じられたか。更にその翌年十月十日勃発した革命当時、どこにゐてどういふ態度でこれに処したか、聞きたいことは山ほどありながら、その後も会ふ機会はあつたが、到頭聞き終へなかつた。息子の張世良といふ青年は、南方に珍しい肥満型で劍橋大学に遊学したとやら、英語をよく話したが、これは私の顔を見ると愛想よく笑ひ、満月の夜に月見団子を、そのかあいい子供の手からすゝめられたことを覚えてゐるのみである。

スマトラの東海岸州、華僑の所謂蘇東の首府メダンは、当時人口八万、その内三万は華僑で、夜、華僑のみの住区へ客家路を馬車で行つたこともたびたびながら、何の知識も得なかつた。ス



マトラをも含めてインドネシア共和国の成立した今日、華僑たちは相変らずその商魂を發揮してゐるのであらうか。とりわけ客家の出だつたと思ふ張氏一家の近況を、占領者としてあつたことそ

れ自身がすでに失礼だつた当時と異る、いまの私は知りたくてたまらない。

(帝塚山学院短期大学教授)

## 浄智寺谷の支那村

関口 泰

北鎌倉は映画の「晩春」や「麦秋」に出てくるので若い人の間にも知られて来たが、二十三年前、昭和五年、北鎌倉駅が夏期停車場から本駅に昇格した頃には、乗降客は毎電車に一人か二人の淋しさであつた。

東慶寺は、縁切り寺といわれた、妻の離婚を保護する特権をもつ尼寺として有名であるが、今では、西田幾多郎博士を中心にして、安倍能成一家の墓、岩波茂雄の墓、鈴木大拙夫妻墓、和辻哲郎所有の墓域のくいも竹籬の中にある新名所になつてゐる。

浄智寺はその隣りの谷を占めてゐる。実は浄智寺の方が鎌倉五山の第四として、五山第二の円覚寺と五山首位の建長寺の中間にデンと座つて、その隣りに東慶寺が北条時宗の妻君によつて開かれたのである。

浄智寺谷には、今は二十一二軒の家が建つてゐるが、私が住宅を建てた昭和五年には、お寺から輿には、私の家きりなかつた。

その後二年目に長唄の杵屋小桃次が庵風の家を建て、ついで山岡鉄舟の弟子劍禅神道の小倉鉄樹老人の鉄樹庵ができた。そこへ画家の遊龜女史が嫁入られたのは、それから更に数年後の事であつたらう。今はトンネルの向うの、東の谷の日当りのよいところへ画室が移され、その上には映画の小津安二郎氏が住んでゐる。

これは二十年後に話が飛んでしまつたが、昭和四五年の頃には、大正の大震災で倒れたまま、浄智寺の本堂も出来ていなかつたので、中島真雄翁が心配されて、浄智寺復興のために、浄智寺谷を開いて住宅地にする計画を立て、支那関係の人々の間に、分譲——といつても寺の地所で売るわけにゆかないので貸地であるが——したのである。

中島翁というのは、観樹將軍といわれた三浦梧楼子の甥といつても、三浦觀樹の説明からしなければならぬのは何にもならない。北京に順天時報、奉天に盛京時報という、日本人経営の漢字

新聞を興して対支文化政策を行つた在支五十年の支那通の老人である。

これでも今はピンと来ないが、霞山會館の東亜同文會を事務所にして、昭和九年から十六年まで七年間、対支回顧録正統二篇四卷菊版四千頁を越える大著、対支功労者伝記編纂の大事業を八十年前後の老軀を以て統督監、実は大部分を執筆した人であるといつた方が「天地人」の読者には親しみがあつて、わかりいゝかも知れない。

この中島翁の御世話で、北京で三井関係の仕事をしてゐた江村豊三氏の分を私が譲りうけたのである。そして南の方の隣りは張作霖の顧問町野武馬氏で、その上が芳沢謙吉氏であり、下の方の北隣りが、北京の水道を建設した辻野朔次郎氏、その向うが山本二郎氏で、弟の有田八郎氏の家を作つて、書画骨董を蔵する支那建築を建てることであつた。

しかし実際は浄智寺の門内に、鉄嶺で事業をしていた権太親吉氏と、門前に松井石根大将の弟で、張學良の顧問であつた松井七夫氏が邸宅を設けた外は、後から加つた私が住んだだけで、町野氏は湯ヶ原へ別荘を作るし、芳沢氏はフランス大使になり、山本氏は死ぬというようなことで、中島翁の計画した支那村は結局出来なでしなつた。そして辻野氏の場所には鉄樹庵が、山本氏のところは相模年寄の高砂親方が、町野氏のあとは久松陶苑が、芳沢氏のところへは、イギリス大使館商務参事官のサンソム氏が家を建てた。サンソムさんが戦争で引上げたあとは稲葉正凱氏が住み、その邸の上に当る天柱峰に五輪塔と記念碑を建てて、天柱峯の三

字を八十三歳の中島翁に書いて頂いたのが、今に残つて、ハイキングの若い人々の腰をかけることを提供してゐるのである。それから、浄智寺谷の支那村と題したが、それは計画だけで出来ずにしまつた支那村だつたのである。

むしろ今となつては、サンソム氏が家を建て、住んでゐたといふことが、浄智寺谷の最も顕著なる歴史的事実として残つた。サ・ジョージ・サンソムは、日露戦争がはじまる前年から三十年間、イギリスの外交官として日本に滞在、日本を研究してゐた人であり、終戦後には極東委員会のイギリス代表であつたといふことよりも、現に米國コロムビア大学極東研究所長として、日本研究の世界的權威であり、東京大学で五回の連続講義をした「世界史における日本」が岩波新書になつており、「日本文化史」が創元選書三冊になつて出ていることによつて、日本の知識階級には知られてゐることを思う。

サンソムさんはここに家を建てるまでには、何ヶ月もまだ榛の木林であつたその土地へ来ては本を読んでもおられた。いよいよ家を建てる時には自分で深川の木場へいつて材料を選ばれた。ストゥの煙突は日本の城の櫓のような趣を出し、客間の壁はのみ銀を張り、檜の白木の膚をいかし、庭は岩窟のある山手は雪舟、下手の芝生は紅梅を植えて光琳だといふように日本的なものであつた。そしてこの地が元の来朝僧竺佛髻仙が住つてゐた楞伽院の跡であつたであろうことに特に興味をもつたことと思う。今もサンソム夫人の愛して植えた椿がイギリス種の黄水仙と共に残つてゐるのである。

(朝日新聞社顧問)